

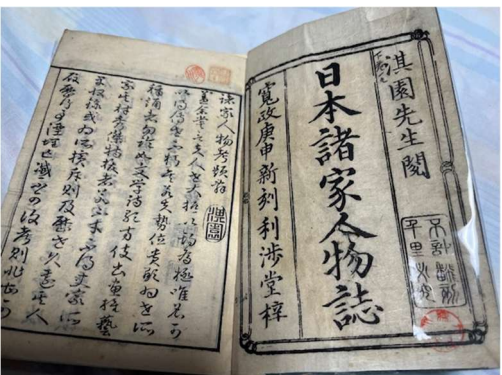
# 古書のたのしみ（令和七年六月）

土屋 博

一「日本諸家人物誌」淇園先生閱

（利涉堂、寛政庚申十二年刊）

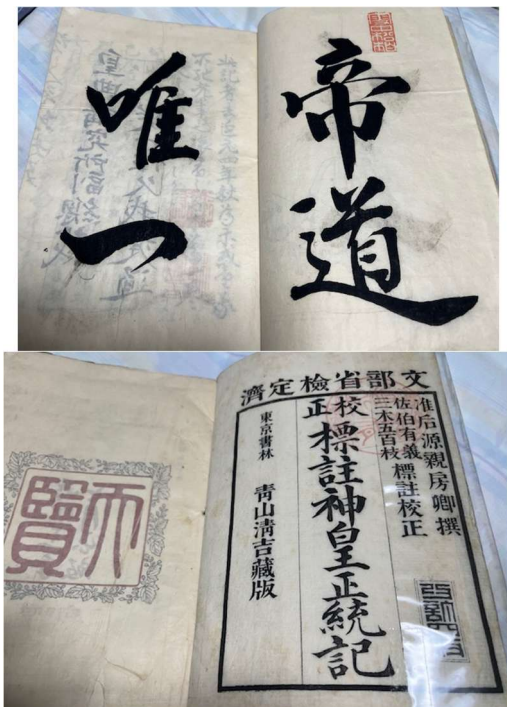
古書價格四百圓也。寛政十二年、すなはち西暦千八百年刊行の書籍にして、日本の古本屋の相場は二乃至三萬圓程度。江戸時代を代表する人名辭典と覺ゆ。儒家部には、藤原惺窩あり。「名は肅字は歛（かん）夫其先世々播州細川に食邑す。父の名は爲純、所謂冷泉家なり。先生幼にして穎悟常ならず。人呼て神童とす。一旦髪を削て僧となり落の相國寺に入舜首坐と號す」云々。歌學並國學部には、北村季吟あり。「江州北村の人、名は季吟、拾う穂軒と號す。或は呂庵と稱す。和學を貞徳に受く」云々。



二「校正 標註神皇正統記 全」准后源親房卿撰、佐伯有義・三木五百枝標註校正

（青山清吉増版、明治二十五年改訂四版、定價金三十五錢、八十七丁）

古書價格三百圓也。文部省検定済教科書。初版は明治二十四年。皇典講究所副總裁従一位久我建通（一八一五年生れ、一九〇三年歿）の「帝道唯一」の題字あり。



### 三「日本陽明學派之哲學 全」文學博士井上哲次郎著

(富山房、明治三十三年刊、定價金壹圓六拾錢、六四〇頁)

古書價格千百圓也。二度目の購入なり。目次は第一篇中江藤樹及び藤樹學派、第二篇藤樹蕃山以後の陽明學派、第三篇大鹽中齋及び中齋學派、第四篇中齋以後の陽明學派。「西郷南洲嘗て佐藤一斎の言志四錄中より百有一則を抄録して金科玉條とせり。其心を修め膽を練るもの全く陽明學より來たれり」と。

### 四 雜誌「中學世界 自拾號至拾貳號」合本

(博文館、明治四十一年八月十日號、九月十日號、九月廿日増刊號)

古書價格三百圓也。増刊號には舊制高校の入試問題集、掲載せらる。たとへば、明治四十一年七月に舉行せられたる第一高等學校の國語の問題例、以下の如し。國語作文「自信」(字数は八百字以内とする)。漢文解釋、左の語に文字の誤謬あらば之を正せ。「イ牧舉、口鹵簿」。

(註) 枚舉は一つ一つ數え上げること。鹵簿(ろぼ)は天子の行列。

### 五「花情月思 美文千題」秋梧散史編

(名倉昭文館、明治四十四年六版、定價金六拾錢、六一七頁)

古書價格三百圓也。初版は明治四十三年。緒言に曰く、「新しき希望の世を照す初日出のさまより、花紅葉のながめ、さては三百六十五日を送り盡すてふ除夜百八の鐘はいはずもがな物に感じて嬉しき、事に觸れて悲しき、皆この一卷に尋ぬべし」と。池田ひさよ「初日出」より、「曙の清光、靜かに上りて、碧玉の天露に濡れし朝の星は消えぬ。今大海のひんがし、

幔幕開かれて、幾千の光線を放ちて、美しき初日は、麗々と波の底より表はれ初めぬ」云々。

六「四十七名士之四十七士觀」大町桂月批評

（至誠堂書店、明治四十三年刊、定價金五拾五錢、二七〇頁）

古書價格四百圓也。序に曰く、「明治四十三年一月一日發行の『日本及日本人』に『四十七名士の四十七士觀』出でたり。われ今茲に四十七名士の四十七士觀に向つて一々批評を試む。これも畢竟するに四十七名士を評するものに非ずして己れを評するものなるべくや」と。乃木大將曰く、「父は泉岳寺に行く毎に線香を義士の墓に供へ我をも拜せしめたり。父も叔父も常に熱心に義士の話を聞かしたり」と。桂月評して曰く、「げに幼時の教育と境遇、殊に無言の教育の大切な事が切に感じられて、千萬言を聞くよりも遙かに印象の深きを覺ゆ」と。

七「愛山文集」山路愛山著

（帝國行政學館史書研究部出版部、大正五年五版、定價金六拾五錢、四八八頁）

古書價格三百圓也。初版は大正三年。現代名家文選シリーズの第七卷なり。山路愛山（一八六五年生れ、一九一七年歿）は、東洋英和學校神學部卒、徳富蘇峰の民友社にて健筆を振へり。目次は、豐太閣論、伊藤侯を論ず、大石内藏助、平政子論、九十九里濱雜、王陽明の哲學など。

3

八「山路愛山講演集 第一編、第三編」

（大江書房、大正五年刊、六年刊、定價金參拾錢、五拾錢、一六七頁、二三三頁）

古書價格各三百圓也。講演テーマは、開國五十年史梗概、神道論など。「今日以後は必ず世界的帝國の統一の時代が来る。詰り世界が四つとか五つとかの本當の帝國になつて最後に一つになる時機が實に明日に迫つたと言つて宜しいと考へる」と。また、「能く考へてみると、人の中に神は常に働いて居るものである。日本帝國を建設した至尊、それと共に働いた英雄豪傑を神として拜んだ古人の心には何の悔るべき所は無い」と。

九「日本學生全集 第一卷」

（教育の日本社、昭和六年刊、定價金壹圓、大學編二二一頁、中等編一九二頁、小學編二〇〇頁）

古書價格四百圓也。本全集刊行の使命は、「①全國學生生徒の文藻を鼓舞して彼等自身を情

智的に結びつけると同時にそれ等の人々の自由な発表機關であること、②

十「古刊源氏物語書目」藤田徳太郎著

（駿南社、昭和九年刊、定價金參圓、二七一頁）

古書價格千二百圓也。函入。著者藤田徳太郎（一九〇一年生れ、一九四五年歿）は東京帝大文學部卒、浦和高等學校教授。昭和二十年六月二十九日下關空襲により逝去。

十一「定家明月記私抄 全」堀田善衛著

（新潮社、一九九三年刊、定價四千三百圓、五九三頁）

古書價格五百圓也。函入。一九八六年刊の正篇（定家十九歳より四十八歳まで）及び一九八八年刊の續篇（定家のその後七十四歳まで）を併せ合本としたる「決定版」なりと號す。著者の堀田善衛、戰時中に明月記に觸れ、拾九歳定家の言葉「紅旗征戎我が事に非ず」に愕然としたる由。

十二「堂々たる人生 谷崎潤一郎傳」小谷野敦著

（中央公論新社、二〇〇八年四版、定價本體二千四百圓＋税、四四五頁）

古書價格五百圓也。初版は二〇〇六年。著者小谷野敦は一九六二年生れ、東大英文科卒、比較文學博士課程修了、ブリティッシュ・コロンビア大學留學。第十一章として「源氏物語から敗戦まで」あり。谷崎は東北帝大教授を退官したるばかりの山田孝雄（よしお）（一八七五年生れ、一九五八年歿）を校閲者に指名し、その指示に従ひ、藤壺との密通の描かるる場面を削除せり。

（令和七年七月十日受附）